

出題の意図

■各科目の出題の意図

英語

IとIIでは、歴史・文化、人の発達・心理、生命・環境、科学技術などの内容の文章が出題されています。これらは一般的な知的関心事ですので、日頃からこうした知的な話題について書籍や一般誌を通じて知識を得ておくと思ひます。また、それぞれの大問の後半の設問では、文章の主張とその根拠について理解できていれば、解答が容易になるものと思ひます。英語でも日本語でも、知的な文章には、何かしら問いがあり、それに対する答えを与えるように書かれていることが多いです。英語の教科書や英語長文を扱う参考書で学ぶ時にもこうした点を踏まえて文章を読むようにしてみましょう。英語の言語的な側面についても設問が用意されていますが、これらも本文の理解に基づいて考えることでより正解しやすくなるようにデザインされています。語彙や文の構造の中には、一見すると学習範囲を逸脱しているように見えるものもありますが、当該の文の前後の内容や選択肢や問いの立て方によって、その範囲に収まるようにしてあります。したがって、語彙や文法について、参考書などを使ってじっくり取り組んでおきましょう。とくに語彙は重要ですので、出来るだけ多くの語を発音・意味・用例とともに覚えておくといひでしょう。

IIIは二人の人物間の会話の空欄を埋める問題です。それぞれの選択肢の英文は言語的には易しいものですが、一連の会話が破綻なく成立するためにはどの内容が続くのかを予測することが要求されます。日英語の映画やドラマの台詞を観察・分析したり、英語学習用のラジオ番組のダイアログをたくさん聞いてみたり、可能な対策は多様です。

IVは整序作文です。日本語文を参考に、与えられた語彙を使って同じ意味を表わす英文を作るという問題です。このタイプの問題では、日本語文に引けられ過ぎると、かえて使うべき英語の構文が分からなくなります。日本語と同じ内容を英語で表すのに、どんな構文を使うかを日頃から意識して英文の勉強に励んでください。逆に言えば、使える構文の数が少なければ、適切な解答にはたどり着けません。英語の文型や構文の参考書に掲載されている例文や、学習者向け辞典の例文を、日本語訳を参考にして意味を理解して音読して覚えてしまっ、いつでも再現できるようにしておくのが、英作文の鉄則です。

国語

現代文、古文ともに標準的なレベルの問題ですから、まずはふだんの授業を大切に、反復練習によって国語の“力”を確実に身につけておくことが大切です。

そもそも、国語の“力”には、①基本的な読み書き能力(リテラシー)、②論理的な思考力と表現力、という2つの側面があるのではないのでしょうか。①は、たとえば漢字の知識や言葉の意味を把握した上で、文章を正確に読み取ったり適切に書いたりできる力のことです。文法や修辞技法、文の組み立て方なども含めて、日本語表現を構成する基本的な事項をどれほど知っており理解しているか、そしてどれくらい正しく使えるか、ということです。一方②は、ある文章について、それが表現しようとしている感情なり思想・主張などを成り立たせている枠組みや文脈を理解する力であり、それらをふまえて論理的に文章を書く力だと言えるでしょう。入試問題では、こうした“力”が問われるのです。(一) (二)の現代文は、かなりの分量の文章をかざられた時間で読み解かねばなりませんから、構成や趣旨・主題をすばやく的確に把握する訓練が欠かせません。そのためにも、日頃からさまざまな文章に触れ、読解することが必要です。多読と速読を繰り返しながら、文章全体の大まかな流れやテーマを上手につかめるようにしておけば、内容理解や文の挿入位置など多くの設問に対応できるはずですよ。

空所補充や語句解釈などの問題も例年出されていますが、文脈のなかに適切な語句を埋めたり、文脈におけるある語句の意味するところを確定したりするためには、さらに一つひとつの言葉が持つ微妙なニュアンスの違いに注意しなければなりません。ここでもやはり、ふだんからいろいろな文章を読んでおくことが大きな支えとなるはずですよ。ただし、これらの問題で求められているのは精読です。個々の表現に立ち止まり、一つひとつの言葉の意味を吟味し、まめに辞書引いて確認しながらゆくりと読み込むことです。ちなみに、古典文法と古典文学史について必ず最低1問ずつ出されていますが、現代文でも文法や文学史を問うことがあります。国語便覧などを参考に、基本事項を復習しておきましょう。入試対策に王道なし。急がば回れ。成功への近道があるとすれば、それは何よりも地道に基礎学力を積み上げることと、言葉への自覚的態度と知的な好奇心とを養うことにちがひありません。

(三)の古文も同様です。基本語彙(重要古語)と古典文法の基礎を正確に理解し、敬語などを手がかりに文の主語・述語関係を見誤らずに読むことができれば、それほどむずかしい問題文でも設問でもありません。とはいえ、古語や文法を丸暗記することが有効な対策とは言えません。むしろ、具体的に古文を読むなかで、辞書で調べ確認しながらそうした知識・学力を修得するほうが、結果的に応用力もつき、入試問題にも対応できるのではないのでしょうか。その意味で、要点は現代文と変わらないはずですよ。ちなみに、古典文法と古典文学史について必ず最低1問ずつ出されていますが、現代文でも文法や文学史を問うことがあります。国語便覧などを参考に、基本事項を復習しておきましょう。入試対策に王道なし。急がば回れ。成功への近道があるとすれば、それは何よりも地道に基礎学力を積み上げることと、言葉への自覚的態度と知的な好奇心とを養うことにちがひありません。

日本史

歴史は、政治・経済・文化などが個別に存在しているわけではなく、いろいろなことが互いに作用し関わり合って展開しているものです。そのことに注意して教科書を繰り返し読むと、歴史において部分と全体とが緊密な関係をもっており、時間的・空間的に連続していることが見えてきます。単純に年代やできごと・人物名を記憶するのではなく、それぞれの有機的なつながりや意味を考えながら理解を深めるようにしてください。

例えば、昨年度の問題では、関連する出来事を古い順から並べ替えるものが8問あり、歴史の流れを把握していることが求められています。そのほか、ある出来事の前年に起きたことや、それと同年の出来事を問うものも毎年のように出されており、逆に、年代自体をシンプルに問う問題はほとんど出されなくなりました。2021年度入試では、第一次世界大戦以後の金輸出をめぐる政府の対応についての文章で、空欄に「解禁」「禁止」「再禁止」の語句を組み合わせて、それぞれの因果関係を問う問題が出されました。2020年度入試では、漢字一文字ずつの選択肢から二つを選んで、一語を完成させるという問題も出されました。これらの問題に対応するには、用語を単に丸暗記するのではなく、それ自体に込められた意味について深く考えることが必要となります。また2019年度には、ペリが浦賀に來航した「癸丑」年(1853年)の次の「癸丑」年(1913年)におきた出来事を問う問題が出されました。干支が60年で一巡することを知らないならば正解を導くことができない応用問題です。

このように、単なる丸暗記では対応できない問題が多く出されてきたことからすれば、まずはそれぞれの時代を大づかみすることからはじめて、歴史的な因果関係に留意して、より深く個別の事象を見るようにすることが大切です。また、史料は歴史叙述の証拠として重要ですから、特に教科書に収載されているものは必ず目を通して、そこから何がわかるのか、よく考えておいて下さい。

くどくなりますが、自分なりの問題意識をもって教科書を読むと歴史への関心は高まり、繰り返し読めば用語も次第に覚えることになるでしょう。そして、頻度の高い事柄は必ずと記憶することになりますから、できるだけたくさん問題を解いてみることで、本学の過去問題に慣れておくことは言うまでもありません。

世界史

教科書をよく読むことはもちろんですが、歴史年表や歴史地図も活用して、総合的に理解することが龍谷大学の世界史入試の対策には大事です。教科書に載っているような歴史的な出来事は、どれも、事件が生じた地域だけでなく、その周辺の地域や、場合によっては、はるか遠い地域にまで波及し、時期的にも数十年、さらには何世紀も後の人々の政治や生活に影響を与えることがあります。こうした関連性や影響を理解するためには、歴史年表と歴史地図の活用は欠かせません。一番の対策は、歴史に関心を持つこと、歴史のおもしろさを知ることです。そのためにも、年表や地図・写真・図版などを見て、あれこれ想像力をふくらませてみましょう。

龍谷大学の世界史には地図がよく使われます。これは、受験生の皆さんに歴史の流れや地域相互の横の関係を考えてもらいたいからです。現代は、情報化社会、グローバル化の時代などとよく言われますが、人・モノ・情報の移動・交流・流通は、歴史的に見れば特に新しいことではなく、はるか古代から、それぞれの時代や地域に応じて行なわれていたことなのです。写真や図版が多く出るのも、そのようなことを踏まえて設問を作成しているからです。ぜひ、

教科書に載っている写真・図版・地図には、目を配っておいてください。龍谷大学の世界史では、事件の起こった細かな年代を問う設問はほとんどありません。王朝が交代した年や革命が起こった年など、大きな歴史的な事件の年代を覚えておくことは、世界史の学習には有益なことです。年代の暗記にこだわるのはあまりよくありません。それよりも、大きな歴史の流れの理解に時間を割くよう心がけるべきでしょう。事件の起こった順番を問う問題も時々ありますが、すべての出来事の順番を正確に覚えていなくても、重要な事件の前後関係とその流れを理解していれば、正解にたどりつくように出題されています。大きな歴史的な事件の前後の流れや各地域の関連をつかむ努力をしておけば、高得点が期待できます。現代史に関して言えば、新聞やテレビで、海外のニュースに日ごろから関心を持っておくことも大切です。

問題文はかなり長いものもありますが、文章を読み解く能力は国語に限らず、すべての教科に必要な基礎学力です。過去問を解いてみる際に、あるいは受験当日でも、ただ単に設問に答えるだけでなく、問題文をよく読み、出題者がどのようなことを意図し、何を問うているのかを理解するように心がけてみてください。それが勘違いやケアレスミスを防ぐ一番の対策にもなります。

政治・経済

教科書や授業などによって政治・経済に関する基本を理解することがまず大切です。この科目に限らず、学習において正しい知識を習得することは大切ですが、「なぜそうなのか」や、その問題の背景を考え、知識をテーマごとに体系化してください。本学や大学入試センターの過去の入試問題を解いた後も丁寧に考察することが必要です。とりわけあなたが解答を誤った問、解答があやふやであった問に対しては、きちんと理解しておくことが大切です。

2022年度入試の問題も法律・政治分野、経済分野、社会分野の3つのすべての分野から出題されると思われるので、教科書全体を丁寧に学習してください。教科書の総ページ数は、日本史や世界史と比べて少ないですが、図表や脚注の重要性は高くなります。先生が授業で話される周辺の事（必ずしも教科書には触れられていないこと）も教科書の内容の理解を深める意味でも意義があるので、注意して聞くようにしてください。

さらに、現代の政治・経済の理解に資するための歴史感覚を養い、この科目に関連する新聞などの報道にも関心を持ってください。この「政治・経済」については、2022年度入試の出題方式も、2021年度のそれと同じくマークシート方式となります。3つの大きな問題から成り立つといったような出題の様式も2021年度のそれが引き継がれるものと思われます。また、授業で教科書とともに配付される資料集もよく見ておいてください。

数学(文系・農学型)

どの日も3問出題され、全問が記述式です。あたえられた問題を読みとって理解する力、論理的に考える力、さらにていねいな計算、ていねいな作図など問題を正確に処理する力、また正しい答えを人がわかるように説明する表現力を、総合的に発揮してもらうためです。数学的知識としては、したがって、教科書を理解する程度で十分です。満点をとることも不可能ではありません。出題される問題も、教科書の基本的問題、標準的問題が中心です。なお、以上のような趣旨から、正しい結論が書かれていたからといって満点とは限りません。逆に、正しいすじ道で解答しながら、何らかのミスのため正しい結論に到達しなくても、必ずしも零点とは限りません。

数学(理工型)

理工数学では、数学Ⅰ、数学Ⅱ、数学Ⅲ、数学A、数学Bの「数列」と「ベクトル」が出題範囲です。ただし、公募推薦入学試験(11月末実施)では、高等学校における授業の進度を考慮して出題しています。龍谷大学の理工数学の入試はすべて「完全な論述式」です。最終的な答が正しくても、論述が不十分な答案は減点の対象となります(不正解とされる場合もあります)。逆に、答を間違ったとしても、それまでの論理展開や途中の計算が正しければ部分点が与えられることがあります。論述式の問題は敬遠されがちですが、「自分の考えをわかりやすく整理して正しく伝える」ように努めれば、マークシート方式や穴埋め方式の問題よりむしろ取り組みやすいと言えるでしょう。

物理(理工・農学型)

基本事項を理解して正しく使いこなせれば解答できる問題なので、教科書や問題集の標準的問題を偏りなく解くことが重要です。特に、数値を代入しての計算や、複数の式を変形して解答を導出する問題の正答率が例年低いので、問題の解答を眺めるだけでなく、実際にノートに書いて計算するようにして下さい。また、基本事項でもパターンからはずれた尋ね方をすると正答率が意外に低い場合があります。難問の解法パターンを記憶するより、標準的問題を自分で納得してきっちりと解けるようにするとよいでしょう。

こちらが用意した選択肢の中から正答を選んでもらう形式なので、自分で式の計算を始める前に選択肢を一覧し、どんな記号を使った答えが要求されているかを確かめておくこと効率がよいでしょう。問題文の中に解答のヒントが含まれている場合もあります。文章を注意深く読む習慣をつけておくことよいでしょう。また、物理で出てくる記号にはすべて単位がついています。自分の得た式の単位が要求されている量の単位に一致しているかを確認すれば間違いを少なくできるでしょう。

化学(理工型)

まずは、「化学基礎」および「化学」の全範囲において、基本となる項目をしっかりと理解しておくことが重要です。基本的な物質・化合物の名称とそれらの化学式、構造式、性質をすぐ書き出せるようにしておきましょう。結晶構造については、それぞれの結晶の特徴を理解し、単位格子の大きさから密度を算出できることが求められます。化学において重要な法則や関係式をその意味も含めてよく理解し、それらの式を活用できるようになることが大切です。それらを何度も繰り返して、式を活用する際のケアレスミスをなくす努力をしましょう。いくつかの問題集にある基本的な問題に数多く取り組み、出題の意図を正確に読み取って適した方法で解いていく経験を積んでおくことよいでしょう。

生物(理工型)

理工生物は基礎知識を問う問題がほとんどですから、高校までの生物の教科書の基本的な内容をよく理解しておくことが重要な対策となります。ただし、教科書で説明されている語句をそのまま記憶するのではなく、関連分野のつながりをきちんと理解しておくことが大事です。理工生物の一つの特徴に、知識のみを問うのではなく、実験・観察の結果を読み取って解釈させたりするような論理的思考を必要とする出題があげられます。教科書の「課題探求」や「探求」などの項目も併せて学習し、「なぜそうなるか」を考える癖をつけておくことよいでしょう。理工生物では、それほど長くはないものの、論述問題も出題されますので、正しい文章で、論理的に説明できるように対策を練っておくことよいでしょう。

化学(農学型)

まずは、教科書に記載のある基本事項をしっかりと理解することが大切です。基本的な物質・化合物の名称、化学式・構造式や性質については、きっちり覚えることが必要になります。また、重要な化学反応についても、よく理解することが大切になります。

また、実験方法やそれに用いる器具などについても理解しておいて下さい。計算問題も敬遠せずきちんと取り組めるようになって欲しいと思います。また、油脂、糖、アミノ酸、タンパク質などの天然有機化合物は農学と深く関係しています。もし、高校の授業進度が遅い場合は、教科書を先取りして意欲的に勉強してください。

生物(農学型)

生物の幅広い分野から、まんべんなく出題されます。得意不得意の領域を作らないことが大切です。各項目の基本事項の確認を大切にしましょう。また、その事項の発見経緯や実験事例などもあわせて覚えておくことよいでしょう。計算や考察問題も含まれますので、基本的な計算問題はマスターしておくとともに、普段より論理的思考力を鍛錬しておきましょう。